

からくり人形

からくりとは、江戸時代（1603～1867）末期に流行した娯楽の一つである機械人形や時計仕掛けの自動人形のこと。高山祭の3台の屋台には、精巧なからくりが施されている。屋台のからくりは人形で、その動きを操作するのは、屋台の中にいる人形遣いのチームである。各チームは、人形の細かい部分を操作し、その動きをあわせて、人形の動きをできるだけスムーズにする必要がある。。

からくりは、少なくとも7世紀頃からさまざまな形で作られていたが、16世紀後半に西洋の時計技術が導入されるまで、日本では一般的ではなかった。からくりのメカニズムは、江戸時代の技術の粋を集めたものといえる。

からくりの発展には、当時の法の影響が大きい。1690年代に徳川幕府が制定した儉約令では、下層階級が立派な衣服や豪邸、華美な装飾品を持つことを禁じていた。祭りの屋台はこの法律で免除されていたので、富を誇示したい町民は、複雑な細工が施されたからくりなど、祭りで使うさまざまなものを発注することで、それを誇示したのである。

1700年代初頭から1800年代後半にかけては、高山祭のほとんどの屋台に1つ以上のからくり人形があったが、火災やその他の事由により、それらの多くが失われた。現在の高山祭では23台の屋台のうち4台にしかからくりは搭載されていない。春祭りの「三番叟」「石橋台」「龍神台」と、秋祭りの「布袋台」にからくりがついている。今回の展示では、三番叟と石橋台に使用されていたからくりを展示している。